

經濟論叢

第八十二卷 第四號

- 金融政策の效果……………一 谷 藤 一 郎 1
- シュムペーターの帝國主義論……………静 田 均 24
- 十九世紀におけるアメリカ労働日思想
についての一考察(≡)……………小 林 英 夫 39
- 日本型賃金構造の分析視角……………西 岡 孝 男 53
-

昭和三十三年十月

京 都 大 學 經 濟 學 會

シュンペーターの帝国主義論

静 田 均

わたしはさきに『シュンペーター帝国主義論序説』と題する一文を草し、『経済論叢』第八〇巻第四号に発表した。それはシュンペーターの帝国主義論のいわば序説的部分にかんする考察であつたが、本稿はそのあとをうけていわば本論的部分にかんする考察を企図したものにはかならぬ。前者と後者とのあいだに長い時間的中断を余儀なくされたのは、急にアメリカ視察旅行に出かけることになつたためである。関係各位に深く謝さなければならぬ。

一

シュンペーターの主論文の第四節は、『近代絶対君主制下における帝国主義』と題し、つぎのような章句をもつてはじまっている。『近代ヨーロッパの初期には、われわれにとって特に興味のふかい帝国主義の一類型を見出す。この帝国主義は一七、八世紀にヨーロッパの各地に起つた絶対主義国家——それは君主國が封建的領主や階級に勝利をせめた結果生まれたものである——の性質にその基礎をもっている。一六、七世紀のヨーロッパ大陸ではどこでも、こうした絶対主義国家形成の過程が、民衆の政治的氣力を骨抜きにし、旧來の政治的要因が崩れさつたあとには、王侯とその將兵および役人だけを残すこととなつてしまつた。西ヨーロッパや中央ヨーロッパに存在していたいろいろな種類の立憲体制のうちで残存したのは、ただイギリスのそれだけであつた。そして独裁國家が権力と

活動力とを十分にもつていたところではどこでも、帝国主義的傾向が動き出し、それは特にスペイン、フランスおよび大部分のドイツ領においてはなはだしかった』（第四節）。シュンペーターは絶対君主制下におけるヨーロッパ諸国の帝国主義の具体的例証として、フランスのルイ十四世やドイツのフリードリヒ大王やロシアのエカテリナ二世などをあげ、いろいろの説明を加えているが、なかんずくルイ十四世にかんする叙述がもつとも精細である。

シュンペーターによると、フランスにおいても他の諸国と同じように、絶対主義的民族国家は、国民のなかの好戦的要素の軍事組織、一つの戦争機械にほかならなかつた。国王の主たる関心は、裝備の整つた直属の大軍を維持し、その威容を示すことであつた。しかし当時の貴族はなかなか実力をもつていたから、その懐柔のためには役職を与えたり、年金を与えたり、いろいろと肝胆を砕かねばならなかつた。のみならず、『国内における国王の地位を維持するといふ点からいつても、外征において成功を収めることが必要であつた。……フランスが機会あるごとに夢中になつて外征したのは、何の不思議もない』（第四節）。かようなわけであるから、『独裁国の好戦的性格やその戦争政策は、その国の社会構造上の要請や支配階級の伝来の素質などによつて説明できるのであつて、征服の結果、直接えられる利害が問題なのではない』（同上）。

シュンペーターは一七世紀の末から一八世紀にかけて行われた戦争を商業戦争(Handelskrieg)と見なす理論を『かなりの誇張を含む』ものとして斥ける。けだし、経済的には何ら重要な理由は存しなかつたと考えるからだ。すなわちシュンペーターによると、当時の産業はまだ幼稚であつて、わずかに手工業の域を脱しかけた程度のものにすぎなかつた。資本輸出はほとんど問題でなかつた。商品生産の規模があまりに小さかつたから、輸出が国家の政策において中心的な地位をしめる、ということもありえなかつた。植民地問題でさえ、大国のヨーロッパ政策に

はほとんど影響しなかつた。『マーカンチリズムの根本理論が強硬外交を合理化するのに好都合なものであつたこと』、『どの戦争においても、マーカンチリズムの考えているような経済的利益が可能なかぎり保護されたこと』などは疑いをいれぬにせよ、これを過大に評価してはならない。『産業はむしろ国家政策の下僕であつて、国家政策が産業に奉仕したのではなかつた』(同上)、とシュンペーターは喝破する。

もちろんシュンペーターといえども、領土の拡張によつて直接利益がえられていたことを完全に黙殺しようとするものではない。『交通不安のために武力をもつて通商を保護する必要のあつた当時においては、いずれの国も海外やヨーロッパにおいて自國の基地をもつことに関心をよせ、また植民地の保有にも利益を感じていた』ことを認める。そればかりでなく、『絶対君主にとつて、征服は権力と軍隊と所得とを増加させる契機であつた』ことさえも肯定する。にも拘らず、シュンペーターは、伝統的な鬭争慣習がすでに存在し、また戦争のための機構が準備されていたのでなければ、征服政策を遂行したいという心理的要請は実現するに由なかつたであろうと説き、絶対主義國家の膨脹政策も実利の要請だけでは説明がつかぬ、と結論づけるのである。なるほど実利の要請だけでは説明されぬかもしれない。しかし実利の要請を全く眼中におかなかつた征服のための征服でなかつたことも、またたしかである。シュンペーターは歴史を動かすある特定の要因のみに関心を集中するあまり、他の要因の作用をいづしか論外に追放しているようにわたしにはおもわれる。

一六世紀から一八世紀にかけてのヨーロッパは、いわゆる絶対主義の時代であるが、それは同時に近代的ナショナリズムの第一波が昂揚した時期でもある。國際競争は激化し、列強は世界制覇をめざして、ヘゲモニーの争奪に狂奔した。富國強兵は当時の合言葉であり、膨脹政策の背後には國威の發揚と経済的利益の伸張が控えていたこと

は、争われぬ事実である。もちろんその推進力ないし担い手は国王であり、皇帝であったに相違ない。当時の観念では、君主と国家ないし国民とは完全に同一視されていた。絶対主義の経済政策は、とりもなおさずマーカンチリズムである。だから、絶対主義とマーカンチリズムは表裏一体の関係にあるといつてよい。前者はもっぱら政治面に即した概念であるに反し、後者はより多く経済面に密着した概念である。絶対主義時代の国際戦争は、しばしば王位継承をめぐる展開された。国家と国家とのあいだには合縦運衡が行われ、バランス・オブ・パワーが国際政治の指導原理とされた。しかし問題はそれだけにつぎるのではない。マーカンチリズムの対外的側面は通商戦争であり、植民地獲得のための競争でもあつた。E・H・カーは書いている、『対外的には、マーカンチリズムは他の国家との関係において国家の富と力を増進しようとした。富は金銀塊のような最も単純な形で考えられ、輸出によつてもたらされた。しかもこの時代の静的社会観においては、輸出市場は全体としての増加を許容しないものであり、量的に固定していたから、一國がその市場と従つてその富を拡張する唯一の方策は、必要とあれば、「通商戦争」を起していづれかの外国から市場を奪取することであつた。戦争はこうしてマーカンチリズムの究極の目的であると同様に、その政策の手段ともなつた』(E. H. Carr, *Nationalism and After*, 1945 大窪憲二訳)『ナショナルリズムの発展』昭和十七年、一〇ページ)。

要するに絶対主義時代の帝国主義をうんぬんするとき、政治と経済の両面にわたる現象を全一として理解するのが普通である。単なる政権の護持や軍事機構の温存だけが問題ではなく、対外的な国威の発揚は、同時に国富の増進と兵力の強化と結びついていたのであつて、けつして無目的ではなかつた。この期の帝国主義においても軍事力だけでなく、経済力が大きな役割を演ずること、経済力の追求は軍事力の追求と同じように可能的な最大限をめ

さすことを見落すべきではあるまい、——たといブルジョアジーが未成熟であつて、主導的役割を演ずるにいたらなかつたことが動かぬ事実であるとしても。

シュンペーターは帝國主義を武力による領土の拡大のみにかかわらしめて考へようとする。彼の念頭にあるのは侵略のための侵略、征服のための征服、戦争のための戦争である。そしてそれを特徴づけるものは、無目的と無際限にほかならぬ。彼の理論が帝國主義の社会学というより、むしろ軍國主義の社会学という印象を与えるのも偶然ではなからぬ。

二

シュンペーターが古代から近代におよぶ各国の史実を縦横に分析して、他の追隨をゆるさぬような新境地を開拓したことは、以上においてわれわれの見たとおりであるが、それをあらためて整理し要約するならば、結局のところつぎの三点に概括することができよう。

第一、『何らはつきりした目標にしばられない「無目的な」武力による膨脹への傾向、すなわち戦争や征服を求める無合理的な非合理的な純粹に本能的な性向が、人類においてきわめて大きな役割を演ずる』(第五節)という疑うべからざる史実の存在。非常に多くの戦争が『考へぬかれた尤もな利益の観点から見ても適当とおもわれる理由』(同上)なしに強行されてきた。

第二、そこで問題は、この戦争を求めらるべき必要性ないし意欲は何かということになるが、シュンペーターのこれに対する解答は、單なる『衝動』や『本能』に言及するだけにとどまらず、さらに一步を進めた点にその特色がある。

つまり『民衆や階級が生き残るために武人とならざるをえなかつたような客観的な生活上の要諦』(同上)にその奥深い根源があるのであり、『遠い昔そのような環境のもとでえられた心理的素質と社会的構造がいちど確立されると、その本来の意味と生命保存的機能がなくなつてしまつてからも、ながくその力をもちつづける』(同上)といふのである。

第三、シュンペーターは、さらに前述のような性向ないし構造の存続を助長する第二次的な要因として、二つのもものを指摘することを忘れない。一つは『支配階級の国内政治上の利害關係が好戰的性向を助長した』(同上)といふことであり、もう一つは『戦争政策によつて経済的または社会的にそれぞれ個人として利益をうけるような人たちのもつ影響力』(同上)だ。しかし、これらは飽くまで第二次的な要因にすぎない。

さてこれまでのところ、シュンペーターの考察の範囲はまだ絶対主義時代までに限られていた。それらの帝国主義は、一口でいえば旧い帝国主義の範疇に属する。だが、われわれの切実な関心はむしろ資本主義が確立してからの新しい帝国主義にある。ひとは一九世紀の七〇年代から二〇世紀初頭にかけての期間を特に帝国主義の時代と名づけた。それは列強間における領土拡張運動が激化し、世界分割が公然と敢行されたことによつて知られている。だから、あらゆる帝国主義論の焦点は、資本主義と帝国主義との關係にあるといつてもよからう。シュンペーターはこの問題にたいしていかなる解答を与えようとするのであろうか。われわれはつぎにそれを見なければならぬ。

三

シュンペーターはいう。産業革命によつて幕をあけた資本主義は、社会構造に大きな変革をもたらした。経済事

情の変化にともない生活様式、思考方法、政治情勢もまた全く面目を一新するにいたつた。新しい資本主義社会において主導的役割を演じたものは、いうまでもなく産業的・金融的指導者であるブルジョアジーである。『資本主義的企業家たちはかつての支配者たちと戦つて、国による統制に発言権をかちとり、国家の指導力に喰ひこんだ。かれらの成功、その地位、その財力および権力そのもののおかげで、かれらの政治的・社会的地位は高まつた。かれらの生活様式やその思考形態は、社会生活の上でますます重要な要素となつてゆき、かれらの行動や欲望や要求や信仰が、社会共同体の全貌の中ではつきり現われるようになってきた』(第五節)。他方では、これに対応して労働者もまた新しい階級的地位をしめるようになった。『一九世紀のあいだに典型的な近代労働者が、ますます社会の全体的様相を決定するようになってきた。というのには、競争資本主義はそれに内在する論理のゆえに労働に対する需要を増加しつづけ、そのために労働者たちの経済的地位や社会的勢力を高め、ついにはこの階級をも政治上無視できないものにしてしまつたからである』(同上)。さらに資本主義は新中産階級としての知識階級をつくりあげ、独立の役割を演ずる機会を与え、新しい活躍の舞台を提供した。最後に金利生活者もまた資本主義によつて生れた一つの階級である。

『かれらは』、とシュンペーターは書いている。『古い世界から引き離されて、自分たちのための新しい世界——分化され機械化された世界——を建設する仕事と取りくんたのであつた。だから彼らはいやおうなしに民主化され、個人主義化され、合理化された。彼らが民主化されたのは、由緒ある権力や特権が巾をきかせていた社会が崩壊し、産業界の変動によつて揺り動かされる不断の変化の社会になつたからである。彼らが個人主義化されたのは、彼らの生活が不変不易の客観的要因によつてではなしに、自分の力で切り開く可能性をもつようになったから

である。彼らが合理的となつたのは、彼らの経済的地位が不安定となつたために、生きぬこうとすれば、不斷に思慮深く合理的に判断して事に処していかねばならぬようになったからである』(同上)。

以上に展開したような変化は、われわれの当面のテーマにとってきわめて重要な意義をもつ、とシュンペーターは強調する。第一、本能的なものごとと右の過程を通じて後方に追いやられる。近代の経済形態のもとは、伝統的慣習があたかも単に伝統的だということだけですたれてゆくように、また生殖のごときもつとも強靱な本能でさえ合理化されると同じように、『腕力による闘争を必要としていた原始時代の事情の結果生じた帝国主義的本能』も、日常生活の変化につれて衰滅するものと考えざるをえない。そのうえさらにもう一つの要因がある。

資本主義社会における競争制度のもとでは、どのような経済的地位のひとでも、全精力を経済活動に傾けざるをえない。そうでなければ、落伍してしまふであろう。『競争制度のもとでは、資本主義以前のどの社会においてよりも、戦争や征服にはけ口を求めねばならぬような過剰のエネルギーは少い』(同上)。

かように推論を進めたあとで、シュンペーターはわれわれを独自の結論に導く。『純粋に資本主義的な土壌のうえには、帝国主義的衝動は育ちにくい』。『資本主義社会の民衆は本質的には非好戦的素質のものである』。『資本主義が経済に浸透しているところではどこでも、また経済を通じて近代国民の中に資本主義が浸透しているところではどこでも、反帝国主義的傾向が現れると期待してよい』(同上)。シュンペーターは独特の論理で思ふ壺の結論にまで引張りこむのであるが、はたして実際はどうであらうか、と誰しも反問を浴びせかけたくなるにちがいない。しかしシュンペーターは彼の理論が事実によつて裏書きされると主張し、つぎの五点を指摘する。

第一、資本主義社会、とくに資本主義に特有の諸要素のあいだでは、『戦争や領土拡張や内閣外交や軍備や職業

的軍人ならびにその人たちの社会的地位などに対する原理的反対が起つてゐる。『この反対は、いちはやく資本主義化したイギリスにおいて、しかもイギリスの資本主義的發展と歩調をあわせて起つてゐる』(第五節)。

第二、資本主義が浸透したところではどこでも、強力な平和的政党が出現した。その結果、戦争を起そうとする、いつでも国内政治上の戦いを必要とした。これに対する例外は稀にしか存在しない。

第三、資本主義の産物である産業労働者の階級は、どんな場合でも熱心な反帝国主義者である。また社会主義政
党は、労働者の利益ばかりでなく、その自覚的意志をも代弁している。

第四、資本主義の時代には、『戦争防止の方法や国家間の紛争を平和的に解決する方法』(同上)が発達した。た
とい個々の調停裁判や国際会議は一場の茶番劇に終つたことがあるとしても、帝国主義が力をえるに必要な機会が
制限されたことは、否定しがたい事実である。

第五、アメリカ合衆国ぐらゐ『前資本主義的な諸要素や残滓物・追想・権力諸要因などを背負いこんでゐること
の少い国はほかにない』。同時に『合衆国ぐらゐ帝国主義的傾向を示すことの少い国はほかにないであろう』(同上)。
合衆国は軍備縮少や調停制度をいち早く提唱したばかりでなく、もつとも熱心に推進した。

以上シュンペーターのあげた五点は、それぞれ傾聴にあたひする内容を含むとはいへ、まんざら異論の余地もな
いことはないように見える。ここで立入った検討を加えることはさしひかえるが、簡単に直観だけを述べさせて貰
えるなら、わたしはつぎのようにいいたい。第一点および第五点から、読者はシュンペーターがひどく英米の肩を
もつという印象をうけるかもしれない。第二点および第三点についていえば、国際的危機が切迫すると、どんな政
党でも超党派的態度に豹変しうることは、過去の歴史の教えるところではないか。第一次大戦の前夜、各国の社会

主義政党や労働組合が戦争の防止にあれほど熱意を傾けたにも拘らず、最後の瞬間に逆転したことをわれわれは想い起す。第四点として掲げられた事例は、今日から見ればやや古い。われわれは第一次大戦後に国際連盟をもち、第二次大戦後に国際連合をもった。いづれもシュンペーターの所説を強化する事例として追記するにあたいしよう。しかし国際社会における権力政治の前に、これらの機構がいかに無力を暴露したかという事実も忘れざることはできない。満洲事変および北支事変における日本、ヒトラー・ドイツのオーストリーおよびチェコ・スロバキアの併合はいうにおよばず、現に国際連合すら大國の拒否権の発動によって難航を余儀なくされているのではないか。

最後にシュンペーターが指摘する五点を通過して、わたしのいささか奇異に感ずるのは、帝國主義諸國の内部事情の変化だけが強調されているにとどまり、帝國主義の對象となる諸國、とりわけ後進諸國におけるナシヨナリズムの抬頭、民族解放運動の展開などの反帝國主義的傾向のもつ意義が、まったく不問に付せられているということである。もつとも後者は特に第二次大戦後に顯著となったのであり、シュンペーターの主論文は第一次大戦中の執筆にかかるもののごとくであるから、かれこれ併せ考えると、時代的制約が彼の視界をささぎつたものと解すべきであるかもしれないが……。

四

以上われわれの見たように、シュンペーターは、資本主義が浸透すればするほど、ますます反帝國主義的傾向がさかんになると説く。そこで反帝國主義的傾向がなかんずくはつきりと現われるのは、『資本主義それ自体がもつとも強力なところ』、『資本主義がもつとも進歩し、抵抗を受けることがもつとも少なかったところ』、『ブルジョア

の意味における民主主義がもつともよく政権に接近しえたところ』(第五節)でなければならぬということになる。しかし『資本主義がその性質からして反帝國主義的であると考へてもよいはずである』とすると、資本主義のもとにおいて現実に存在しているところの帝國主義的傾向は、いったいどう説明したらよいのであろうか。へたをする、解きたい謎だというデレンマに陥りはしないか。おそらく何人もそうした疑問に逢着するにちがいない。しかしシュンペーターは、待っていましたとばかり即座に答へるのである。それは『資本主義から生れてきたものと見なすことはできず、資本主義世界の外からもちこまれ近代生活の中の非資本主義的要素によつて支えられた異質的なものと思へるほかはない』。『現在見受けられる帝國主義的傾向は、今日の時代が絶対君主國から承けついでものである』。『帝國主義はいわば隔世遺傳的なものである。……いいかえれば、それは現在の生活環境から生れてくる要素ではなく、過去の生活環境から生れてくる要素である。……それは社会構造の隔世遺傳であり、感情的反応に関する個人的・心理的慣習の隔世遺傳である』(第五節)。ここにシュンペーターの理論の眞骨頂がある。われわれはおそらくこれを隔世遺傳説と名づけてもよいであらう。

すでに帝國主義の隔世遺傳説がうち建てられたとすると、帝國主義の衰亡論を導きだすことは、きわめて容易である。後者はいわば前者の系にすぎない。問題は帝國主義の将来に関する予想であり、見通しである。シュンペーターはいう、『帝國主義を生みだした生活上の要請は、すでに永久になくなってしまったのだから、帝國主義もまた徐々に消え去るべきものである。たとへ、もともと非帝國主義的な戦争さわざでも、それが起るたびに帝國主義を復活させる傾向があるとはいへ、なおかつこのことは正しい。社会の進歩につれ、かつて帝國主義に主役を演じさせていた構造が衰へて他の構造——帝國主義に存在の余地を与えないような、そして帝國主義を支持する権力

要素を取除くような——がそれに代つて現れてくるにつれて、帝国主義もまた構造的要素ではなくなる。すなわち、それは慣習的な感情反応の要素ではなくなる。なぜなら、生活も精神もだんだん合理化され、かつての機能的要請は別の仕事の中にとけこんでゆき、従来の武力的エネルギーが機能の上で変形されてゆくからである』（第五節）。

こうした見通しは、単に頭の中だけで考えた予想なのではない。シュンペーターにとっては、過去の歴史から割りだしたところのものである。『もしわれわれの理論が正しいとするならば、帝国主義は人間と文化との歴史の中で後になって現われてくるものほど、強度を減じているはずである。このことはあらためて証明を必要としないほどの事実といつてよい』（同上）。シュンペーターはその例証として一八世紀の絶対君主国の帝国主義をもちだし、これはそれ以前の帝国主義に比べて、『より文明的な』ものになっていると主張するのだが、別に一九世紀や二〇世紀の帝国主義を一八世紀の帝国主義と比較しているわけではない。後者が前者に比べてどれだけ『より文明的な』ものになっているかは、大きな疑問として残るであろう。

資本主義社会の構成員は本質的に合理性をもち平和的性向をもつということ、——これはシュンペーターの理論をつらぬく根本命題である。彼の脳裏にある資本主義は経済いがい要素を捨象した純粹の資本主義体制である。それだけ抽象的であつて具体性を欠く。いわば一種の理想型的概念であるといつてよい。ところが現実においては資本主義といつても、国により、また発展段階を異にしたが、経済的・社会的・政治的構造はおのづから相違せざるをえない。それに照応して誰が、いずれの階級がヘゲモニーをにぎるかがわかれるであろう。一般には産業資本主義と金融資本主義、競争資本主義と独占資本主義などと段階の区分をもうけるのが、普通のようなものである。他方、資本主義の発展についてデモクラシーも変貌すると説かれている。ブルジョア・デモクラシーから大衆デモ

クラシーへの進化。それとともに国家の性格ないし役割も異ると考えられている。夜警國家から福祉國家への移行というがごとき、すなわちそれだ。現代資本主義においては、國家の役割が著しく増大した。それと同時にいわゆる圧力団体や官僚機構が重要な役割を演ずるようになった。

しかるにシュンペーターにあつては、そうした發展段階の相違は考慮にはいる余地がなく、單に資本主義一般が問題となるだけである。換言すれば、先資本主義時代との比較において、資本主義の特徴づけが行われているにすぎない。彼は資本主義を合理主義の一角に塗りつぶし、經濟における競争の圧力があらゆる人間の過剰なエネルギーを奪いさるるかのように説く。だが、競争ということは相手方を打倒することを目標とするものである。競争において勝敗を決するものは実力であり、勝たんがためにあらゆる手段が選ばれる。それは必ずしも合理的なもののみに限られはしない。必要とあれば、非合理的な手段もとられよう。したがって浪費をとまなうこともまた免れぬ帰趨である。資本主義が合理性を有することは多分に強調されてよい。けれども、だからといって、非合理性を完全に排除しうるもののごとく推断するならば、あまりに一面的に失し、素朴な迷信におちいることとなるであらう。

競争は国内において行われるだけでなく、当然に國際間におちても流じられる。資本主義經濟の擴大につれて、原料の泉源や製品の販売市場を國外に求めようとする欲求がますます激化し、競争に拍車をかける傾向のあることは、何よりも事實が雄弁に語るところである。競争のもたらすものが優勝劣敗であるとすれば、それが帝國主義にまで逸脱しうる可能性を包蔵することは、そう簡単に否定しがたいのではないか。

シュンペーターにあつては、經濟は政治の関与を嫌悪し、ブルジョアは政治からつねに自己を守ろうとするもののごとく説かれている。一九世紀前半のイギリス、レッセ・フェールlaissez-faireの全盛期においては、たしかにそうした一面

があつたにちがいない。しかし私的独占、圧力団体、官僚機構が強力となり、マス・コミュニケーションが発達するにつれて、国家が集团的な利害と野心の道具になりさがる危険に見舞われるようになったことを等閑に付してはなるまい。こうした事実を抜きにして、現代の事態を説くことは、あまりにも迂遠に失するであらう。一九三〇年代においては、イギリスにおいてさえデモクラシーの危機が叫ばれ、ドイツにおいてはファシズムが跳梁をほしいままにした。経済と政治の密着、アルトラ・ナシヨナリズムの抬頭を、われわれはまざまざと回想することができる。

シュンペーターは現代の帝国主義を資本主義に固有の内在的傾向と見ず、絶対主義時代における帝国主義の隔世遺伝である、と解する。おそらく過去の残滓の再燃というほどの意味であらう。しかし国家は、それがいかなる時代においてであれ、またいかなる形態であるにせよ、外敵からの民族の防衛をその重要な任務の一つとする。そのかぎりにおいて、軍事機構を必要とすることは、不可避的である。資本主義の発展につれて、軍事機構はますます近代化し、過去に比べてまったく面目を一新するにいたつた。とりわけ現代においては戦争技術の革命的進化にともない、ますます組織化されて、質的にも量的にも整備拡充をとげるようになった。軍事と経済は相互に密接な関連をもつ。資本主義が発展すればするほど、軍事機構が廢物と化し、無防備状態に近づくと、とうてい考えられない。國際間の緊張がクライマックスに達するや、往々にして武力闘争がくりひろげられる危険性は、つねに伏在しているというのが、ありのままの現実なのではなからうか。

第一次大戦後われわれは國際連盟をもち、さらに第二次大戦後には國際連合をもつた。これらの機構が世界平和の増進に役立った一面は、もとより過少評価を許さない。しかし同時に他の半面において、強大国の権力政治の場

として逆用されたという幾多の事例に眼を閉ざすことは、できないであろう。現状をもつてすれば、資本主義はたとえ較高度の發展をとげたとしても、自力で帝國主義を制御するだけの性格に転化するかどうか、すこぶる疑わしい。むしろ高度資本主義諸国の外部にある後進諸地域におけるナン・ナリズムの勃興こそが、あるいは弱小国の中立的立場よりする批判的態度こそが、わずかに帝國主義からの解放を世界史の軌道にのせる槓杆として作用するにとどまる、といえないであろうか（八・二〇）。

（本稿は昭和三十三年度文部省科学研究交付金機関研究による、研究成果の一部である）